

ベトナムの夢は果てしなく広がる

路面を列をなして走るスクーター、一台のそれに乗るのは一人に非ず、時には数人。まぶしい日差しの中、ベトナムの街、路肩の石の椅子に腰を下ろして丼のフォーを食して歓談する若者たち。青春という甘さより、みなぎる未来への活力を隠すことなく示しての巷間の風景である。1968年から1970年アメリカ滞在の頃はテレビを通じて、もろに肌に感じたベトナム戦争の悲劇は跡形もない明るさであった。土地の人達がたむろする市場の如き屋外の食事場で、大きな青い菜っ葉で食べられるものなんでも包んで口に運べば、それは正に自然の恵みに浴する幸せである。レバン・メイ社長に案内された、Lotus Food Co.のむんむんする水蒸気中で、エビを加工する若い女性達には、日本の古い女工哀史は影もない。2012年Kurihara Vietnam社から委託された「Fujikin Bac Ninh Factory Project」はそんな街の風景の中でのコンサル業務であった。全て、Local Standardで要求条件が設定されても良いと、十分に魅力を感じる国での業務遂行であるはずなのに、外国企業、日系企業の思い上がりは、征服者の傲慢さで、都合の良いStandardで押し付ける解決策となっている。



ロータスグループ レバン・メイ社長とともに



Kurihara Vietnam社にて